

Kawasaki 美術館
金山平三の世界



《大石田の最上川》 1948 (昭和23) 年頃 60.8×91.0cm 油彩・布 兵庫県立美術館蔵

優れた技量を盛り込んだ
情感あふれる名作

現在は新幹線が走る山形の大石田は、近世には最上川の舟運と陸路の中継地・集積地として栄えた。通りに面する整然とした家並みは、この町の栄光を偲ばせるかのようである。

洋画家の岡田三郎助が一九二七年(大正六年)に寄せた紀行文で触れてから、多くの芸術家が画題を求めてこの大石田にやってきた。一九三三年(大正十二年)に初めて訪れた金山もその一人であったが、やがて彼はこの町に大いに魅せられ、戦前から戦後にかけてほぼ毎年のようにこの地を訪れ、数多くの風景画を手がけた。また歌人の斎藤茂吉や町の人々と心温まる交流を深め、最終的には住民票をここに移した。

この作品は、対岸の横山との間に架けられた大橋の上から、最上川の眺望をとらえたもの。川岸の木々、雪を頂く遠くの花々の稜線、それらを映し出す水量豊かな最上川の水面、いずれの描写も地誌学的な正確さを保ちながらも、風景画の名手たる金山の優れた技量がふんだんに盛り込まれており、情感あふれる名作へとこの作品を高めるのに貢献している。

(兵庫県立美術館学芸員
相良周作)

金山平三と川崎重工



金山平三画伯は、1883年(明治16年)神戸に生まれ、1964年(昭和39年)80歳で生涯を終えました。1909年(明治42年)東京美術学校(現在の東京芸術大学)を首席で卒業した後、欧州各地で制作を重ね、1916年(大正5年)には、第10回文展に出品した作品が特選第二席になりました。生涯にわたって旺盛な創作活動を続け、自然風土を相手に多くの名画を残し、その業績は近代洋画史上に燦然と輝いています。

川崎重工は第11回文展に出品された「造船所」が縁となり、その後、交流を深めました。画伯の晩年には、自選作品138点の永久保管の依頼を受け、その作品を預かるほどでした。後になり川崎重工は、一部の作品を残して、兵庫県立近代美術館(現・兵庫県立美術館)にすべて寄贈しました。